

『ある晴れた日に』私注

——高見順へ南洋行V(二)——

木村 一信

一九四一年(昭和一六年)は、高見順にとっては慌しい年であった。一月二六日から五月六日までの約百日間、高見は『如何なる星の下に』(昭14・11・15・3)を『文芸』に連載した際の挿絵を担当した画家の三雲祥之助と共に、当時は蘭印(蘭領東印度)とよばれていたジャワ・バリ島(現在のインドネシア共和国)の旅に出ていた。高見の死後に、その全体の刊行、完結のなされた歴大な『高見順日記』は、周知のように、このジャワ・バリ島旅立ちの日から書き始められている。

帰国後は精力的に、蘭印に題材を得た日記やエッセイ、短篇小説の類を新聞、雑誌などに執筆する。七月、『新潮』に発表した『文学非力説』が物議をかもし、文壇に論争をまきおこしたが、高見にとって形勢はむしろ不利であり、些かの心の動揺を覚えた。

一月、いわゆる「白紙」の徵用令状が届く。高見は陸軍報道班員(宣伝班)としてビルマ派遣軍に配属され、再び外地へと旅

立ったのが、二月二日。『高見順日記・第一卷』の「十二月八日」の項には、「朝食を取ろうとしていると、ラジオが日米間の交戦をつたえる。(中略)折から香港の沖合いを航行中。／一同厳肅な表情」とある。そして、昭和一六年の大晦日は、タイのパノックで過ごすのである。

高見順が「これは私のはじめての書き下しであります」(あとがき)と記した『ある晴れた日に』は、席の暖まる暇もないほどであったこの年に構想、執筆がなされ、日本を離れた直後の昭和一六年一月二日―三日に河出書房から刊行された小説である。この作品の舞台は、全篇バリ島であり、まさに蘭印行の所産に他ならないと言えるであろう。

高見は、昭和一六年、開戦前夜とも言うべき時期に、一体なぜ険悪な空気の漂う蘭印へと出かけたのであろうか。高見と三雲の二人の旅は、傍目には弥次喜多きながらの暢気なものに映ったかもしれない。しかし、高見の内面は見た目とはうらはらの、いわば悲愴感さえあったと言えるように思う。たとえば、それは旅立

ちの直前に新聞に投じられた一文の、次のような言葉からもうかがえよう。

……南へ行く私の気持には、自分だけのをかしの力みかもしれないが、人生に大胆に挑んで行く、その心のひとつのあらはれといふ、そんな強がりもある。

さらに高見は、「とにかく、心はちぢに乱れてゐる」と記しているのである。何が高見をしてこれほどまでの力みと困惑との伴った旅へと追い立てたのか、また、彼は何を企図してそれに身を委ねたのであろうか。

すでに、こうした問題意識のもとに私は「高見順〈南洋行〉序説」と題して小論を草したが、ここでは『ある晴れた日に』を通していま一度、高見の〈南洋行〉の動機とその意義について考えてみたい。蘭印に旅立つ数年前からの高見の創作上の苦悶や私生活上の煩悶、それらとの葛藤や逃避、それにジャワ・バリ島での感慨や啓示などのさまが、ことごとくこの書き下された小説に託されていると言えるからである。以下、こうした目論見のもとに作品を眺めていくことにしよう。

* * *

『高見順日記・第一巻』に、『ある晴れた日に』に関する記述が初めて見うけられるのは、「七月十四日」の項である。もともと、『日記』(以下、このように略記する)は、三月下旬で一旦中断され、七月一日から再び書きつがれているのであるが、「七月十四日／河出書房、丸山君来訪。書き下し長篇の件。」と記され

ている。その次に触れられるのは、「昭和十七年一月一日」である。これも、七月二〇日から一月二二日までの間、『日記』の中断があり、その理由について高見は「日記を書く習慣が身につけてないため」だとの「追記」を付し、もう一つ、特高刑事の「家宅搜索」を懸念し、「本心は書けない」ので「無意味」だから、とも述べている。「一月一日」の記事に、次のような文章がある。

ひさしぶりに日本の新聞を見る。(中略)／河出書房の書下し「或る晴れた日に」と改造社の「新日本文学全集、高見順集」の広告を見る。(中略)／「或る晴れた日に」の続篇、はたして書けるかどうか。

実際に、この作品がいつ執筆に着手され、いつ書きあげられたのかは、『日記』から知ることはできないが、大きな枠で区切るとすれば、その題材と刊行の時期とから言って、蘭印より帰った後、すなわち五月六日以降、徴用されて大阪に下る一月二二日以前に執筆、脱稿のなされたことは間違いない。単行本の「あとがき」には、「いままでの私には兎角せつかちな、某氏の評言によれば立ち話みたいな小説が多いので、今度はでんと腰を据えて、しつこく書かうと思ひました。そのため自分のつもりとしては話の糸口ぐらゐのところまで約束の枚数と日が来て了ひましたが、今後悠々と書きつゞけて行きたいと思つてゐます」(傍点・原文)とある。こうした言葉からすれば、高見にとってこの小説は、かなり力の入ったものであることがわかり、また、刊行に間に合う

ぎりぎりのところまで執筆に携っていたことが推測されるであろう。

かくして、太平洋戦争開始直後といった捷報に湧く、嵐のような情勢下に『ある晴れた日に』は出版になったが、当時の読者の一人である丸谷才一は読了の感想を次のように書いています。

この年九月に改造社から出た旅行記『蘭印の印象』はどうやら読まなかったらしいが、十二月に出た書きおろし長篇小説『ある晴れた日に』は、ちっとも小説じゃないじゃないかと思つたことをおぼえている。この『ある晴れた日に』で、わたしはこの作家に対する関心を急速に失つた。何かあわれな風情のようなものがなくなつたし、ときどき変なところで時局便乗的なことを口走るのが厭だつたのである。もちろんわたしは、そのころ高見のような経歴の小説家がどういう辛い立場に追いこまれているか、どういふ偽装を強いられているかは知らなかつた。

右に引いた文章の中で、末尾の一文は戦後になつてからの丸谷の意見であろうが、それまでのところは、作品刊行後ほどなくの頃の感想とみていいと思う。後に述べるように、たしかに『ある晴れた日に』は、格別、ドラマティックなストーリーの展開があるわけでもなく、また、人間存在の深いところに楔を打ちこむような思想が盛りこまれているでもない。丸谷の「ちっとも小説じゃないじゃないか」といふ言ひ方は、一見、淡々と綴られた随想風の筆致からして当然出される意見であろう。しかしながら、

『ある晴れた日に』私注

作品をよく読めば、『如何なる星の下に』などと比べて地味な話の組み立てから成り、色恋沙汰や情痴に懊惱するような華やかさはないにしても、一人の人物を視点人物にして、主として三人の人間の心性や現在直面している問題などがしつかりと書かれており、「自己改造」を企図してバリ島へと足を運んできた男の、次第に望みの見えてくるさまがよく描かれている。また、作品そのものの読みつけ加えて、作者の年譜的事項、『日記』やこの期のエッセイ、小説をもあわせて『ある晴れた日に』を読み解いていくと、興味深さはさらに増す。本稿のタイトルを「私注」としたゆえんは、作品の構造を探り、主題を検討すると共に、作者により近づいて作品を読んでみようと考えたからである。むしろ、『ある晴れた日に』は、こうした捉え方を要請している作品ではないだろうか。

二

『ある晴れた日に』は、四章から成る作品である。各章には小見しといったタイトルが付され、そのタイトルの出典となった詩集や歌集の一節が引かれている。高見作品にしばしば見つけられる形式である。作者は、この続篇を「書きつづけて行きたい」「あつがき」と述べているが、現在のこされた四章立ての形でもまとまりはあると言えよう。ただ、「岡」という名前で登場してくる人物の謎めいたところについては、思わせぶりのままに放り出されているとの感はいなめない。

作品は、「野崎」と「網代」という二人の人物がバリ島の州都「デンパッサル」に着いたところから始まっている。「野崎」は、年齢は明らかにされていないが、まだ三〇歳にならない独身の男性である。大学の英文科を卒業している。大学時代は演劇研究に没頭していたのだが、それはもう「跡形もなく忘却のなかに消えさせたといふ」。新聞社に入り、数年の間、記者をしていたが「原稿集めの仕事が頓に馬鹿らしく感じられてきて」ほどなくして辞め、ある対外文化事業の団体に入る。が、そこが「関係官庁の予算削減で閉鎖」になったあとは、「家で勉強する」と宣言して一年ほど過ごし、そして蘭印へとやってきたのである。こうした「野崎」は、「恋仲の女」から、「あなたは、なんといふか、駄目な人ねえ」と「哀しい愛情が籠つ」た声で言われ、まいてしまふ。第一章の四節末尾には、「蘭印へ旅立つ直前、野崎は女と別れた。」と記されている。この「野崎」の眼を中心にして作品は進められている。

一方の「網代」は、「通俗小説の作家で、野崎より十ほど年上である」と説明がなされ、また、この二人は「親戚の間柄」だといふ。「網代」は、「恋愛場面の際どくあくどい描写が得意で、それ有名」な作家だったと記されている。この「網代」が「野崎」を蘭印へと誘う。「どうだ、外へ出て自分を改造してみては……と言つて。」とあり、「野崎」から逆に「網代」の目的を問われ、「僕も自己改造の目的で行きたい」と答える。さらに、

最近、網代の言葉によると「だんだん窮屈になつて」得意の

筆を振ふことができなくなつてゐた。「方向転換」をしなればならなくなつてゐた。とも説明が加えられている。

つまり、「野崎」にしても「網代」にしても、それぞれの立場、現状において行き詰まりを覚え、「自己改造」「心機一転」をはかるべくバリ島の旅へ出たのだ、という設定になっているのである。また、右に見たように二人の人物設定を略記してみると、いづれの人物も作者に近いところをもっていることが察せられるであろう。「網代」は、小説家高見がやや偽悪家的にデフォルメして造型され、「野崎」は、高見の私生活面での問題や心性、もの感じ方などが付与されて造られた人間と言えさうである。

さらに、「野崎」「網代」の二人が「デンパッサル」に着くやいなや関わりあうことになった「岡」が、作品において重要な意味をもっている。二人に対して、「思ひがけない日本語」で話しかけてきた男の風貌は、次のように叙述されている。

ジャバの土民によくあるやうな背の低い瘦せこけた身体に、汚いシャツを、着るといふより纏つてゐて、下はよれよれの寸の短いズボン。真黒な素足に木製のサンダルを穿いてゐる。

このため、二人は、「日本人だらうか」と判断に苦しむのである。作品の第二章は、「野崎」が「岡」とじっくり話しこむ場面で終始していると言つてもいいほどの分量が費されている。「日本人の面汚し」とバリに住む日本人から軽蔑されている「岡」は、

しかしながら、「教育もある人」であり、どこか「非凡なところもある」ように感じられる。会体の知れない不安と共に、不思議な興味を「野崎」は「岡」に対して抱くのである。この「岡」によつて「野崎」は、バリへ来る日本人、もしくは「佐々木商店」の店員「山口」などが口にする通俗的なバリ観を訂正され、やがて「野崎」の変革の一助をなす契機を与えられる。のちに再び述べることになるが、「岡」も作者高見につながるところを持った人物であり、彼の役割は陰画ともいへべき高見の姿を表わすところにあるだろう。

「あとがき」において、作者は、「この小説にはモデルといふやうなものはありません。バリ島にをられる邦人に御迷惑をかけてはと思ひ特に一言する次第です」とわざわざ断わり書きを入れている。が、作中でもう一人重要な役どころを務める「佐々木商店」の主人「佐々木」は、明らかにモデルの存在を指摘できるであろう、『日記』には、高見らがバリ島に滞在していた昭和一六年三月六日から三月末日⁽⁶⁾までのうち、六日から一二日までの「メモ」と、一三日から二五日までの間の詳しい記述とがある。その中に、たとえば「三月十三日（前略）バリへ来て飛び込んださきの三浦氏（註）三浦襄。日本の自転車の輸入販売をやっていた氏をたよつてバリ島に来たのである」の所が……（後略）といった記述があり、「自転車の輸入販売」は作品に触れられていないが、「佐々木」なる人物は、この「三浦氏」をモデルにしていることがわかる。このことは、さらに『日記』の他の項目におけ

『ある晴れた日に』私注

る「三浦氏」についての叙述と作品とを比べあわせていけば、より納得されるであろう。⁷⁾

ただ、「岡」の場合と同じく「佐々木」が、「野崎」「網代」の二人に向つてバリ島の歴史、ことに「ププタン」について語る場面が作品中で大事な役割を果たしており、その話に二人は「吞まれたやうに黙つて」聞き入り、「打ちのめされ」てしまう。つまり、この話が二人の「自己改造」の、やはり一つの契機となるのだが、實在の「三浦氏」が高見にこれを語つたとみる証拠はない。『ある晴れた日に』に綴られている事柄と同内容の話をもとめた短篇小説『ププタン悲史』が、昭和一六年一〇月に『サンデー毎日』秋季特別号に発表されている。そこで、「ププタン」については「ほんの数人しか知らないバリ島在住の日本人の一人」の「Kさん」から聞いた話、となつている。この短篇中にて、「Kさん」は「ププタン」のあつた「一九〇六年」の翌年、「一九〇七年明治四十年生れ」とされておる、實在の「三浦氏」は「明治二〇年」の生れであるので、この点はそぐわない。「明治四十年」は、作者高見の生れた年であり、かつ、高見がバリ島にて読んでいたマイケル・コヴァルピヤスの『バリ島』に「ププタン」の記述があるもので、あるいは自分の本から得た知識を「Kさん」（『ププタン悲史』から聞いたという形、また、「佐々木」から聞いたといった形にしたのかもしれない。「佐々木」という人物のもつ意味についても、「岡」と同じく後述することにしたい。

以上が『ある晴れた日に』における主要な登場人物である。人⁽¹⁾

物が出揃ったところで、次に作品の結構を眺めることにしよう。

三

すでに前節にて述べたように、「野崎」と「網代」は、「自己改造」あるいは「心の方向転換」をはかるべくバリ島へとやってきた。「網代」には「材料探しに行く」といった現実的な気持もあったようだが、作品の冒頭は、二人がバリ島のデンパサルに着したところから書き始められていることもすでに見たが、視点人物の役割を担っている「野崎」は、「憧憬のバリ島へ遂に来たのだ」という感慨と共に、街の「がきつな新開地風な雰囲気」に「軽い幻滅」を覚える。「野崎」は、バリ島の魅力として、女性性が「素晴らしい胸」を「裸かにして歩いてゐる」こと、バリ島の「音楽と踊り」、しかもこの芸術が生活の一部となっていること、それに、「千の寺院の島」とよばれる「浮世離れのした変つたところ」といった点を思い描いていた。が、どうやら様子が違つた。そのかわり、風体の怪しい「岡」と名のる男につきまとわれたり、「掠奪結婚」というバリの風習を小耳にはさんだり、また、日本人を警戒するオランダ官憲の「尾行」につけられ、「不快な恐怖感に悩まされ」たりするのである。第一章は「心の郊外に」とタイトルが付されていて、その意味を忖度すれば、ジャワ島を経てバリ島へと旅してきた二人の異国、異文化へのとまどいが点綴された章とも言えるであろう。と共に、この作品の主要な題材が提示された章でもある。すなわち、「野崎」らのバリ島への先入観

が、この後変化していくことを暗示し、「岡」の存在の意味するもの、「掠奪結婚」という激しい言葉の関与する男女の問題、さらには「尾行」の存在の意味する緊張をはらんだ国際関係、といった題材なのである。

第二章のタイトルは「いずれの日にか」と付されていて、島崎藤村の詩「椰子の実」よりとられている。その詩には「いずれの日にか国に帰らむ」との一節があり、おそらくバリ島に長く居ついで落ちぶれてしまつたかに見える「岡」の心持を暗示しているのである。この章での中心題材は、「野崎」が「岡」によって本當のバリを教へてもらうところにある。

「尾行」を氣にして「びくついてゐる」自分に嫌氣のさしている「野崎」は、「かうした手近なところ」から「自分を叩き直さなければ」と考える。その時、「岡」があらわれる。彼によつて、バリの女性の地位、男女同権のこと、掠奪結婚の実情、「被征服民族」であるのにもかかわらず、バリ人の「卑屈な鬻」のなさを知らされる。だが、「岡」は突如、「僕はバリーを愛しすぎた。

そのため、僕は……」と絶句し、「野崎」を驚かす。ますます「岡」の存在の奇妙さにひかれていくのである。身なりが貧しく、「日本人の面汚し」とバリ在住の日本人から蔑まれている「岡」に対して、「野崎」は日本にいた時の他人への反抗的な態度が、なぜか変化していくのを感じる。そして、バリにいる間の「一月だけの結婚」を「岡」からすすめられて、「野崎」は再び驚く。

おそらく、「ある晴れた日に」の続篇が書かれていたとすれば、

「野崎」のバリ女性との結婚が描かれていたかもしれない。「バリーを愛しすぎた」、すなわち「佐々木商店」の店員「山口」から「奴は土人の女と結婚してゐる」(第四章)と軽蔑されている。「岡」と、同じ境遇に「野崎」は身を置く可能性が感じられる。教育と教養のあるらしい「岡」は、女性との恋愛のために身を打ち崩しており、女性問題での心の痛みをひきずってバリへとやってきた「野崎」は、それゆえ「岡」に無意識裡にひかれていてのではないだろうか。そして、すでに別稿にて述べたが、「野崎」と同様に、蘭印へ出立する前の高見にはぬきさしのならない女性問題、すなわち、女性問題から生じた子供の誕生に関する事件があり、それが高見の蘭印行の一つの動機をなしていた。つまり、「岡」なる人物の造型された意図として、作者のプライベートルなトラブルに端を発したところの、女によって身を誤ることへの恐れと不安、また一方、そこに身を委ねつつ自恃と希望を持ちうるか否か、などの錯綜した思ひの形象にあつたのではないか。前に高見の陰面ともいふべき存在であると、「岡」について記したのは、このような理由からである。事実、『日記』や短篇小説『バリーの犬』の中には、「キニン」というバリーの女性への恋慕の情が綴られており、「岡」は、ありえたかもしれない高見の姿として作中に設定されていると言つてよいだろう。

第三章は、「思ひ出は、死んだものを生かす。云々」の『田木繁詩集』の中の一編の詩句からとられ、「思ひ出は」というタイトルがつけられている。ここでは、「佐々木」から聞くバリ悲史と

も言うべき「ププタン」の話を「野崎」「網代」の二人は「打ちめされ」てしまったこと、バリ芸術の代表的な仮面劇、レゴングダンス、ケビアルの踊りを観て激しく心動かされ、「芸の道」について二人は新たな思ひを抱きまなどが描かれている。

「ププタン」というのは、バリ島を征服しようとしたオランダ軍に対して、ラジャ(王)に率られた各王領の人々の「最後の戦ひ」をさす。作品中では、「佐々木」の口を通して、「討死」「身を殺して抗する意味」と説明されている。老若男女すべてが無抵抗でオランダ軍の銃砲の前に身をさらして全滅していった戦いの様子が作品中に語られ、「野崎」はもちろんのこと、「網代」も「軽いネタ探しの気持を激しく打ちめされた」(傍点・原文)のである。ここに、「野崎」は「見のがすことのできないバリ理解のひとつの面」を発見する。

また、バリの芸術、ことにレゴングダンスの名手「チャワン」と「サトリア」については、実名で作中に登場し、その踊りに「生命の躍動」を見、「野崎」らが「名状し難い陶醉」に襲われるさまは、高見の体験として『日記』にも記述があり、この『ある晴れた日に』の中では一つのクライマックスを示す場面となっている。こうして、「野崎」は「猟奇的なバリー観を作りあげてゐた」自らの変化を次第に知っていくのである。それと共に、「芸」のすばらしさに反比例して、バリ島の被征服地としての問題に「物悲しい想ひが渦巻いてゐ」く。

第四章は、「砂うごくかな」とのタイトルになっていて、斎藤

茂吉の歌が引かれている。ここでは、僅かながらも二人の「自己改造」の可能性の見えたことを吐露する場合が中心となっている。「水湧き居れば砂うごくかな」と茂吉歌の一節の引かれた意図もここにかがえよう。

「野崎」と「網代」は、バリ島の芸術のすばらしさについて会話をする。「この素晴らしい踊りを、白人の植民地ではないところで見れたら、どんなにいいだらう」、「あの素晴らしい芸術が、やや極端に言ふなら奴隷の芸術にされてゐることが、何ともはや堪らなかつた」と。そして、二人とも「素直」さや「弱身」をお互いにみせて、自分が變つていくようだと「白状」するのである。それは、バリの芸術家が、「白人の慰みのために踊る」ように見えながら、なぜあれほど「一生懸命踊つてゐる」のかと考え、「芸のために踊る」ということに気づいたからである。「芸を尚ぶ民族」であるバリ人の「芸のために」といった考え方、姿勢に、二人はどうやら啓示を受けたと言えそうだ。

また、「佐々木」の「人生にど、つかと足を踏んまへた」(傍点・原文)バリにおける生き方にも感銘を受け、「岡」を「どなたか、新しい人にお願ひして」という「佐々木」の申し出に、「野崎」はひきうけますと言って、自らも驚き、「網代」をも驚かす。「野崎」のかつて見られなかつた積極的な前向きの姿勢が生れてきたのであつたから。そして彼は、「尾行に對する今までの神経的な脅え、不快感が今は激しい憤りに成つてゐるのに氣附」くのである。こうして作品は幕を閉じられている。

四

前に引いた丸谷才一の『ある晴れた日に』についての批評の中に、「ときどき變なところで時局便乗のことを口走るのが厭だつた」との言葉があつた。たしかに、昨年中には「時局便乗的」と言われても仕方のない表現が見うけられる。それは、第三章、四章にいくつか出てくるのであるが、たとえば、「日本人の体面」ということ、バリ人、インドネシア人と日本人との似ているという点をあげて「勇」と「智」と「仁」をもつた日本人の南方起源説を展開しているところ、バリ島とバリ人の置かれている境遇と比べての「日本に生れた仕合せさ、日本人であることの有り難さ」、「祖国への烈しい愛情」といった心情を述べる「野崎」の姿など、拾いあげていけば眼につくことは間違いない。

これは、『ある晴れた日に』と同時期に書かれた短篇『諸民族』と『ププタン悲史』にも、そっくりの言葉が記されており、高見は「日本に生れた仕合せさ」を本気で感じていたと読者には映るかもしれない。しかし、この時期の高見は、蘭印旅行から帰国するやすぐ新聞に『蘭印から歸つて』(のち、『文化の夢さ』と改題)を投じ、いわゆる〈文学非力説〉論争への第一声を放つた。それが五月末のこと。やがて、『文学非力説』(昭16・7)への厳しい反論が尾崎士郎から提出され、その他の人々の発言も出てきて、問題が大きくなる。『文芸』に「現状への直言」が発表される一月まで、この論争は続いた。とすると、『ある晴れた日に』や他の

パリ島に題材を得た三つの短篇小説は、〈文学非力説〉論争と並行して執筆のなされたことがわかる。つまり、平野謙が指摘しているように、「文壇の有力なタカ派」の尾崎士郎から、「自由主義のもつ敵性に気脈を通ずる」との批判を受ければ、「旧左翼」の高見が「ほとんど恐怖にちかい狼狽を感じ」るのは当然であり、その「狼狽」が自己防衛的な「時局便乗」の表現を生み出したとしてもやむをえないのではないか。虚心に作品を読んでいくと、小説の眼目が「野崎」らの「自己改造」のさまにおかれており、「プタン悲史」とパリの「芸」とに啓示を受けてそれへの見通しの生れる過程を描くところにあることが感得され、ひいき目ではなくとも「時局便乗」は高見の隠れ蓑、すなわち自己防御として使われているとみなせよう。

『ある晴れた日に』について書かれた文章のうち、管見に入った限りでは久保田正文の『解説』が要領を得ていて、すぐれるように思う。そこで、久保田は「作者がそれほど単純に一面的・一辺仆的に、〈日本に生れた仕合せさ、日本人であることの有り難さ〉を信じていたとはおもわれぬ」と言い、「かなり複雑な陰翳がみえる」と指摘している。また、「パリーの踊りに触発された野崎―作者の感想は、(中略)〈文学非力説〉と、それに表裏をなして関係するへ身は売っても芸は売らぬ」思想の原型をなすもののはずである」とも述べていて、具体的な論証は十分になされていないが、まさに久保田の意見に同意するものである。

「人生に大胆に挑んで行く」といったような「力み」もしくは

『ある晴れた日に』私注

「強がり」の心持を伴って、「一触即発」といった危険な国際情勢下にあった蘭印へと旅した高見は、しかしながら、眼に見えなかつた方ではなくとも、意味ある成果を得て帰ってきたと言うべきであろう。その成果のあとを事実と虚構とをまじえながら作品化したのが、この年の多忙さとあわたたしさから推しておそらく一氣に書き下されたであろう『ある晴れた日に』であった。そこでは、パリーの女性に「惚れて」身を持ち崩してしまった「岡」を造型し、その「岡」の存在を引きうけようとする「野崎」の変貌ぶりが描かれ、また、パリーの踊りに衝撃を受けた「網代」と「野崎」は、「奴隷」的状况下にあっても、「芸のため」に必死で生きる人間たちを発見し、言いようのない感銘を抱く。二人の「自己改造」は、こうして徐々になされていく。二人の、というよりもむしろ高見順自身の変革があったと言った方が的確である。『ある晴れた日に』という、一見地味な作品について、その作品構造の分析と共に、作品の背後に見え隠れする作者の肉声をも辿りつつ眺めていくと、作家と作品との織りなす一つのドラマが浮かびあがってくると言えるのである。

〔注〕

(1) 一九六五年九月、勁草書房刊。

(2) 『今年はどうな題材を』と問はれて、昭和一六年一月九日、『都新聞』。

(3) 『日本の文学 第九集』掲載。一九九一年六月刊行予定、有精堂刊。

- (4) 『高見順全集 第七卷』『解説』昭和四五年一〇月、勁草書房刊。
- (5) 作品の第一章中に、「大正生れの僕等の時代」とあり、作品中の時間は昭和一六年であるので、大正初年生れとしても二九歳である。
- (6) 『日記』の「追記」には、「三月いっばいパリに滞留。」とあり、何日までという明確な日は記されていない。
- (7) たとえば、作品の中で、二人が「佐々木商店」を訪ねた折、「主人は生憎くブレンの方へ行つてまして……。」と言われ、「不在」という設定となっている。『日記』には、三月六日のパリ到着の日、「三浦襄はジャワに行き不在」であった、とある。
- (8) 三浦襄について書かれたものうち、管見に入った限りで、最も詳しいのは、原誠の『日本人キリスト者三浦襄の「南方関与」』である(『東南アジア研究』一六卷一、一九七八年六月、京都大学東南アジア研究センター刊)。三浦の生年については、原論文所載の「三浦襄履歴書写し」に拠った。なお、「パリの島の父」と言われた三浦襄の面影を伝える文章に、戸川幸夫『チャワン』(『戦場への紙碑』所収、昭和五九年七月、オール出版刊)があり、『ある晴れた日に』に登場する「チャワン」についても記されている。
- (9) 高見は、原書(英語版)を読んでいる。短篇小説『プタン悲史』に、自分の読んだ本の一節を引用している。昭和一八年一月に、『パリ島』という題名にて産業経済社より翻訳(完訳ではない)が刊行されている。
- (10) 注(9)にあげた『パリ島』、一九頁より二三頁。
- (11) 「佐々木商店」の店員「山口」は、作品中において、あまりいい人間としては描かれていない。が、『日記』をみると、三浦商店の店員芝氏には高見らはずい分と世話になっていて、「山口」のモデルが「芝氏」とは思われぬ。「あとがき」に「モデル」はいないと記したのは、このことを配慮したのかもしれない。

- (12) 「岡」は、掠奪結婚は「形式」であり、実態は「ホネー・ムーン」だと「野崎」に教える。実在の「チャワン」の回想にもそれが出てくるが、その注記に、「女の家族の同意を得ないで女を連れ去り、後に承諾を求める結婚の形。パリでは今でもふつうに行なわれるが、多くは形式的なものである。」とある(『踊るパリ』東海晴美他取材・編、一九九〇年一月、パルコ出版局刊)。なお、この本に「チャワン」や「マリオ」といった高見の作品中に登場する踊り手の回想記が載せられている。
- (13) 注(3)に名じ。
- (14) 『日記』三月二十三日の項には、「キニンに惚れたわけではない。だが惚れたらーというようなこと想像したりした。」とある。また、「パリーの犬」には、「異民族の女への好奇心か。或は又、恋といふやうなものだろうか。」とある。
- (15) 注(9)、『パリ島』二〇頁。
- (16) 注(8)、『戦場への紙碑』、注(12)、『踊るパリ』参照。「サトリア」の名前は、「サデーリ」や「サドリ」と各書によって表記が違ふ。
- (17) 『改造』昭和一六年七月掲載。
- (18) 『都新聞』昭和一六年五月二七日〜二九日掲載。
- (19) 『高見順の「文学非力説」』。初出は、『毎日新聞』昭和四八年一月二四日。ここでは、『昭和文学私論』(昭和五二年三月、毎日新聞社刊)に拠った。
- (20) 奥出鍵は、情報局内秘匿雑誌『出版警察報』や、戦後の高見の発言などを引き、『文学非力説』が高見の「身を危くするようなもの」であったことを論証している。『高見順へ文学非力説』を纏って、『国文学研究資料館紀要』第九号、昭和五八年三月。
- (21) 『高見順全集 第二巻』昭和四九年二月、勁草書房刊。

(きむら・かずあき 本学文学部教授)